



星川だより

熊谷空襲を忘れない市民の会 会報



熊谷空襲から八〇年、
その先へ

吉田庄一



8月14日昼間、そこは戦時下の日常だった。

今年、戦後80年、昭和100年の節目の年である。新聞、テレビなどのマスメディアは、先の戦争の検証など取り組み始めているようだ。それ自体喜ばしいことだが、新聞、テレビなどの媒体そのものが読まれなく（見られなく）なっており、中心的な読者、視聴者が高齢化していることもあり、若い世代には届いていないようだ。田中角栄が「戦争を知っている世代が政治の中枢にいるうちは心配ない。平和について議論する必要もない。だが、戦争を知らない世代が政治の中枢となったときはとても危ない」といった。果たして今はどうだろうか。政治家のほとんどは戦争を知らない世代だ。ということは、今まさに危険な局面になっているということなのだ。

最近、れいわ新撰組の八幡愛氏が予算委員会、防衛の観点からも原発はすべて止めるべきだと問うたが、中谷防衛大臣は、イージス艦とPAC3ですべて撃ち落とすような答弁をしていた。八幡議員はお花畑と応じたが、戦争はゲームではないので武力と武力の競争では防げないし、危険はさらに増すのは明らかだ。戦争を始めるのは比較的に簡単だが終わらせるのは大変難しい。これは歴史が証明しているし、ウクライナ然りガザ然りではないか。同じく予算委員会、国民民主党の橋本幹彦氏（埼玉13区、元自衛官）が、防衛省の「制服組（自衛官）」による答弁を求めたが、安住委員長（立憲民主党）から一喝された一幕があり、国民民主党も嚴重注意したという。国会議員が歴史を学んでいない事実には唖然とする。しかし、歴史を知らない（学ばない）人から見たら「なんで？」と思う人は多いのではないか。こんな質問をする国会議員がいること自体、田中角栄の危惧そのものだが、良識はかろうじて保たれたともいえる。彼は学校や自衛隊で何を学んだのだろうか。



8月14日夜間、米軍の空襲で街は焦土と化した。

さて、私たちの活動だが「熊谷空襲」を立脚点にしている。先の戦争の実態を学び、そこから導き出される教訓を考え、若い人たちに繋げ、平和を持続させることにあたる。熊谷市および市民が戦後取り組んだことに空襲の記憶を残す活動がある。主に体験者の声を集め記録することだが、膨大な資料となつて今に残る。私たちは、そういった体験の記録を読み、今も体験者の声を収集している。また、「最後の空襲 熊谷」の刊行やフィールドワークとしての「戦跡巡り」などにも取り組んできた。しかし戦後80年の現在、「熊谷空襲」を平和の礎としてきちんと物語化できたのだろうかという思いがある。これは個人の感想かも知れないが、この思いは日に日に大きくなつていく。陸軍も海軍も勝てないとなつていく。戦争をなげ始め、日本全土が焦土と化し、アジア太平洋地域では約2000万人が犠牲になるま

で、なぜ戦争を止められなかったのか。軍人の暴走、政治の機能不全だけでなく、産業界はどうだったのか。そしてなりより市井の人々は戦争に熱狂し肯定したのではなにか。戦争の時代、新聞は大きく部数を伸ばした。今でもうフェイクニュースを競って発信し、市井の人々もこれを求め興奮した。歴史修正主義に抗するためにもアジア太平洋戦争を一面的に捉えるのではなく全体像を把握する必要があると思う。

当会は、定期的に熊谷平和講座続けてきたが、講師の加藤一夫先生がご高齢になり昨年9月でお辞めになりました。その後、私が担当になりました。熊谷空襲を学び直すことを始めた。漠然としたスタートだったが、①最後の空襲となつた「熊谷空襲」はなぜ避けられなかったのか。②当時の熊谷の地政学的な状況、とりわけ陸軍熊谷飛行学校と中島飛行機の存在と関わりをきちんと評価する。私の思いは、この2点に収斂していった。まだまだ分からないことは多いが、熊谷空襲から80年の今年、さらに掘り下げていきたいと思う。

イラスト 佐通真由美

語り継ぐ熊谷空襲

大久保由美子



立正大学大学院生伊藤さんは平和教育について問題提起、駒澤大学の齋藤さんは防空法について研究発表。

2024年8月25日(日)、熊谷空襲を忘れない市民の会の夏のイベントが開催されました。今回は熊谷空襲を若者につなぐことに主を置き、発表者は立正大学大学院生の伊藤大平さん、熊谷市在住の駒澤大学生齋藤可奈さんのお二人、そして、パネルディスカッションのパネラーとして、高校生や大学生に参加していただきました。

第一部はシネ・ビデオサークル熊谷の志村さんに、熊谷空襲についてのビデオを上映していただきました。終戦直後の写真などを入れながら、熊谷空襲がよりリアルに感じられる作品は胸を打つものがありました。当時の星川の

写真などもあり、今より細く、家の迫った星川に家が焼け落ち、星川に逃げ込んだ人々が犠牲になったことも容易に想像できました。

第二部では大学院生と大学生による熊谷空襲についての研究発表でした。立正大学大学院生の伊藤さんは地理学を専攻していて、国立国会図書館などの地図を参考に、熊谷空襲により焼けた市内中心部の地図、そこに昔の星川の流れを書き込み、当時の様子を発表してくれました。「あそこの細い道、昔の星川の名残だったの?」という感想が聞こえてきて、第一部のビデオでの紹介と地図とがリンクし、とても分かりやすく、素晴らしい発表でした。



戦跡巡りした熊高や熊女の生徒からの感想。飛び入りで卒論に熊谷空襲を選んだ専修大生や映像で熊谷空襲にフォーカスしている日大生の発言があり若い人たちの熱意が漲る。

駒沢大学生の齋藤さんは、お祖母様が熊谷空襲の体験者で、熊谷西高時代、全国高等学校歴史学フォーラムにて、「ダークツーリズムとしての熊谷空襲」という発表をした経験があります。大学でも研究を続け、今回は「熊谷空襲と防空法」という研究発表をしてくれました。防空法とは簡単に言えば、空襲により家屋が焼けたら、まず消火をすること、空爆された場所から逃げないといけないというような法律で、これのおかげで空襲による被害者が増えたと、各地の事例を発表してくれました。熊谷では体験者による話から、逃げる人が多かったとの印象でしたが、中には消火活動をしようにしていた方もいたとのこと。こういう法律を作ってしまうとは、当時の日本政府、軍部、発言力がなかっただろう国民の事が思いやられます。

第三部でのパネルディスカッションのパネラーは、当会が開催している、高校生を中心にした熊谷空襲戦跡巡りに参加してくれた皆さんが集まってくれました。熊谷空襲の事を次世代につなぐために始めた戦跡巡りでしたが、こ

うして、興味を持ち続けてくれる皆さんがいてくれることは、これからの平和のためにも大切なことです。そしてなによりこのパネラーの方の中に小学校時代、石原小で熊谷空襲の事を教えてくれた先生がいた事、それが熊谷空襲に関心を持った始まりだったと発言がありました。そのことに端を発し、熊谷空襲を次世代につなぐためには、やはり教育は大切だということになり、後日、伊藤さんが熊谷市校長会で熊谷空襲を副読本に入れてほしいとする要望をプレゼンすることが出来ました。余談ですが、ここでも伊藤さんの発表は素晴らしいもので、校長先生方から大きな拍手をいただきました。

最後に、ウクライナやガザの映像がかつての熊谷の映像と重なり、戦争などあつてはならない。そんなメッセージを次世代に伝える大切さがこんなにもリアルに感じられる時代になってしまいました。世の流れが平和の方向に必ず向かう様、私たちの歩みを止めないでいきましょう。



2025年春のイベント

- 3月22日(土)
- 「戦後80年(被爆80年) その先へ！」
- 熊谷市緑化センターノーベル平和賞を受賞した日本被団協事務局次長の濱中紀子(はまなかとしこ)さんと元静岡福祉大学学長の加藤一夫さんをお招きして、核廃絶への闘いの歴史と課題について掘り下げたいと思います。

<告知>2025年夏のイベント

- 8月13日(水)~18日(月)
- ~戦後80年 平和展~
- 「最後の空襲 熊谷」
- 八木橋百貨店8Fカトリアホール
- 共催 平和展実行委員会
- 立正大学大学院地球環境科学研究科有志
- 熊谷空襲を忘れない市民の会
- 後援 熊谷市 熊谷市教育委員会
- 協賛 八木橋百貨店

2025年春のイベント
戦後80年(被爆80年) その先へ!
~ノーベル平和賞受賞記念講演会~

日にち 2025年 3月22日(土)
時間 14:00~16:30(開場13:30)
会場 熊谷市緑化センター2F
熊谷市宮町2丁目7-1 (048-525-7180)

資料代 300円(障がい者・学生無料)
主催 熊谷空襲を忘れない市民の会
連絡先 栗(ひがし) 070-5551-7794
後援 熊谷市教育委員会

内容
講演 日本被団協の活動とノーベル平和賞受賞
● 濱中紀子(はまなかとしこ)
日本被団協事務局次長
講演 核廃絶運動の歴史と課題
● 加藤一夫 元静岡福祉大学学長
ディスカッションおよび質疑応答

● 熊谷空襲を忘れない市民の会 <http://www.peace-kumagaya.org>

会計報告

(2024/8/14~2025/2/24)

収入: 103,285 円
支出: 54,597 円
残高: 80,387 円

編集委員 吉田庄一、小川美穂子、米田主美
連絡先 吉田庄一 (090-4957-9181)
メール imajn241@gmail.com
HP <http://www.peace-kumagaya.org>